

社会科における小中学校の連携

～地域教材を通して生徒の発想を豊かにする授業～

M11EP005

窪田昌彦

1. はじめに

社会科は、社会生活に必要な知識を学習し、それを元にして社会的な問題に対する解決能力を養うことを目的とする教科である。しかし、中学校での状況を考えると、必要な知識の習得にとどまることが多く、解決能力を養うまでに至っていない場合が多いと感じていた。小学校の社会科は、生活に密着しており、具体的な社会的事象を取り扱っているため、児童にとって身近に感じる内容が多く、生活経験の中から学習を進めることができる。それに対して、中学校の社会科は、生徒の生活から離れた社会的事象を取り扱う内容が増えるため、抽象度が増すうえに、必要とされる知識量も大幅に増えることから、知識の習得までで学習が終わってしまっていることが問題ではないかと思われる。

この問題を解決するためには、小学校で行われていた学習内容に着目し、生徒の興味・関心に配慮した中学校での学習を構成することが大切ではないかと仮定してみた。小学校の学習の趣旨を生かして、中学校においても生徒の生活の中にある社会的事象を取り上げることが必要である。そのためには、生徒が生活している地域を題材にした授業を仕組むことによって改善できるのではないかと考えたのである。

地域教材は、地理・歴史・公民の各分野で取り上げることができる。地理的分野では、身近な地域の調査の学習において、実際にフィールドワークを行ったり、公民的分野においては、生活している地域にある社会問題を取り上げたりすることによって、学習内容と生

徒の生活体験を密接にし、問題意識を高めていくことができるだろう。その中でも、今回は歴史的分野に重点を置いて教材を考えていくこととする。これは、地域教材を導入するのが比較的難しい分野であり、取り組み例があまり見られないからである。また、実習校のある地域では、小学校の4年生において身近な地域の歴史の学習として、「堰」を取り上げており、中学校においてもこの学習の流れをくんで、学習を行うことが適当ではないかと思ったからである。以下では、小学校での地域の学習を中学校での地域の学習に結びつけた教材開発の成果を報告していく。

2 先行研究

1) 小中学校の連携のあり方

歴史学習は、小中学校で共通に取り組む教育内容も多く、その違いが意識されることは一般にないかもしれない。しかしながら、両者には歴史事象の扱い方やねらいにおいて違いがあることは、学習指導要領でも明確に述べられている。小学校での歴史学習は、通史的に展開して知識を覚えていくのではなく、遺跡や文化財、年表や資料を活用して人物の願いや働き、文化遺産の意味を考え、歴史に対する興味・関心や愛情を育てるようにすることが求められている。それに対して、中学校での歴史学習は様々な資料を活用して歴史的事象を多面的・多角的に考察し、公正に判断し、表現する能力も求められている。

ところが、中学校卒業時には高校入試を控えていることもあり、知識を獲得することを目的としてしまい、問題を解決するところま

でにたどりついていない場合も少なくない。そのような状態であると、「中学校の歴史学習が小学校に比べて何が発展しているのか明確で」（2009,寺尾・野坂）なくなり、社会科本来の目的には迫れなくなる。

小学校の学習の上に中学校の学習が成り立っているのであるが、学習内容を発展させ、工夫していくために多くの事象を絡めながら学習することが中学校に求められている。中学校の学習が知識を獲得するだけの社会科から脱却していくためには、そうした内容面の改善に加え、様々な学習方法を工夫して指導する必要がある。学習指導要領解説でも、小学校の学習の形態や教材の取り扱い方など「学習方法にも着目し、中学校社会科の各分野の学習が効果的に行われるようにしなければならない」（150頁）と述べられている。小学校社会科の時のように、学習教材を生徒の身近なものから選び、生徒の実感がわくような工夫をすれば、生徒は主体的に問題を解決しようと取り組むようになるというのが、本研究の考える小中連携のねらいである。

2) 地域教材について

身近な地域の歴史の学習を取り上げることは、地域への関心を高め、地域との関わりの中で歴史を理解し、受け継がれてきた伝統や文化への関心を高め、歴史の学び方を身につけさせる意味がある。ところが、教科書に用意されている教材は、政治の中心である地域の歴史を主として取り上げているため、自分の住んでいる地域がどのような状態であったかを問われることはほとんどない。生徒の生活と学習している内容がかけ離れてしまい、興味・関心を見いだすことが難しい場合もあった。そこで、教科書の内容の中央の歴史と身近な地域の歴史を結びつけることによって、自分に関わることとして理解を深めることができる。そのためにも、地域教材を開発し、生徒に提示していくことは重要ではないかと

考えた。

地域教材の有効性としては、「生徒が生活している場の歴史であり、具体的で親しみやすい」「目前にあり具体的で体感しやすいという利点」（2010,福井）があげられている。これは、地域教材が生徒の生活と学習内容との架け橋になることを意味していると思う。生徒が実生活の体験を利用して考えたり、これからの生活への展望を考えたりすることは、生徒のいろいろな発想をひきだし、学習に深みを与えることにもつながる。また、地域教材は、「教材開発の自由度が高く、身近な地域の歴史の学習を通して、歴史の学び方を学ぶ、学びを作り上げていくという活動が展開できる」（2010,福井）と言う。それぞれの地域によって教材を工夫することにより、生徒に考えさせたいこと、伝えたいことを授業の中に盛り込むことができる可能性が広がることを示している。

地域教材には、以上のような利点がある反面で、教材化がなされていないものを取り上げる際のリスクも伴う。教師は資料集めから始まり、その題材から何を生徒たちは学ぶことができるのかを見定めていかなければならない。小学校では、地域教材を年間指導計画の中に位置づけて学習を行っているが、中学校では、個々の教員に資料の選択が任されている場面が多く、学校に教材が引き継がれていることもほとんどない。地域教材は、生徒の興味・関心を引き出せるものではあるが、教材化という点において難しい面も持ち合わせている。

3. 研究の目的

中学校歴史的分野において、小学校との連携を考慮した学習内容や学習方法を開発し、その効果を検証する。学習内容としては、身近な地域の事象を取り上げた地域教材の有効性と可能性を検証する。

4. 研究の方法

1) 地域教材を用いた教材の開発

中学校第1学年における歴史的分野の学習の中で、地域教材を取り入れた授業実践を通して、その有効性を検証する。また、取り上げる身近な地域の事象は、実践校であるF中学校の学区内だけでなく、その周辺にある遺跡、建造物までを取り上げることとした。これは、実践校の学区では、資料収集の点から、適切な事例がない場合があり、取り上げる時代が限られてしまう可能性があったため、F中学校があるK市内までは、その対象とした。

2) 小学校との連携を考慮した学習方法の工夫

生徒が身近な事象に対して課題を設定・解決していく活動を重視し、自分の考えを表現する時間（発表する、記入する）を授業の中に位置づけ、生徒同士の学び合いの時間も大切にしながら授業を進め、生徒自らが学習に取り組むことを推進していく。

3) 授業実践を通じた効果の検証

地域教材の有効性を実証するために、授業中の生徒の発言、授業後の学習感想から地域教材の効果を見取っていく。

5. 研究の結果と考察

第1学年の歴史は、人類の始まりから室町時代・戦国時代までを取り扱っている。そこで、授業に取り上げた地域教材のうち、①双葉地域の古墳、②天狗沢瓦窯跡、③上条堰の3つの授業について検証していきたい。

① 双葉地域の古墳、赤坂台古墳群

a) 教材の概要

甲斐市の双葉地域には、赤坂台古墳群があり、多くの古墳が発見されている。中稜塚古墳はその一つであり、横穴式石室を持つ円墳で、今から1300年ほど前に造られたと推定

されている。発掘調査では、石室内部から直刀、刀子、鉄鏃、金環、ガラス玉が発見されている。赤坂台総合公園（通称、ドラゴンパーク）の北側にあり、この地を訪れる人も多い。5月に行われた第1学年の校外学習の時に見学地に選んだ生徒も多数おり、授業で取り上げる際に予備知識があり、教材として効果的であると考えた。この教材は、古墳の出現を取り扱う内容の場面で利用した。

b) 授業実践から

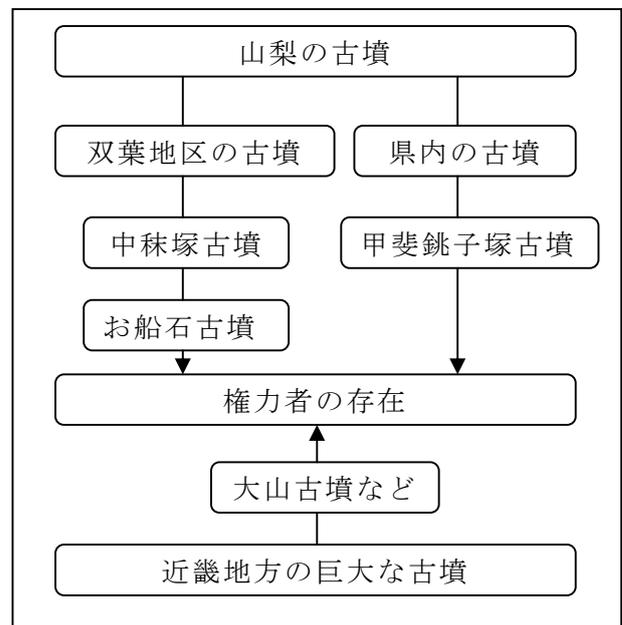


図1 赤坂台古墳群を用いた授業構想図

地域教材を取り上げる理由として、実際に体験することができるという利点があった。中稜塚古墳は、校外学習の見学地であり、また、多くの人々が訪れる公園の近隣にあるため、実際に自分の目で見える機会があり、教材として適切であると仮定した。

しかし、実際の授業では、甲斐銚子塚古墳に代表される前方後円墳の方が生徒は興味を示した。「古墳のことを考えながら日常を過ごしている」生徒はほとんどいないのであって、教材が「目前にある」というだけでは、生徒の興味をひくことはできないということであ

ろう。ただし、「双葉の古墳に埋葬された人々はどのような人だったのだろうか」という発問を行うことによって、双葉地域に権力者の存在があったことに気づき、中央の古墳と地方の古墳を結びつけながら考えることができた。

課題の一つであった畿内を中心とした古墳の学習と、近隣の古墳の学習を通して、お互いを結びつけることはできたのではないかと思う。また、発問やつながりを考えた工夫によって生徒の興味関心を高めることができたのではないかと考える。

②天狗沢瓦窯跡

a) 教材の概要

甲斐市内の敷島地域に存在した瓦を焼いた跡である。天狗沢瓦窯跡は、白鳳期の瓦窯跡とされており、窯跡、瓦ともに山梨県最古であることが判明している。古代において、瓦は寺院や役所といった地域の中心的建造物にしか使用されない貴重なものであったことから、敷島地域に白鳳～奈良時代にかけて重要な施設があったと考えられている。

山梨県内の他の瓦窯跡としては、甲府市内に川田瓦窯跡がある。ここで作られた瓦は、山梨県内の最古の寺院である寺本廃寺で使われたことがわかっている。また、双葉地域においては瓦を作る職人が多く存在したという記録も残っている。この教材は、律令制下の支配を取り扱う場面で利用した。

b) 授業実践から

「瓦窯跡（がようせき）」という名称は、日常生活の中で、ほとんど耳にすることがない。「これをなんと読むだろう」ということから予想することから始め、導入の部分として利用した。

白鳳期では、一般の人々の家は竪穴式住居であり、瓦が使われていたのは権力がある人々の屋敷、もしくは寺院などの建築物において使われていたと考えることが適当である。

権力者としては中央から派遣された国司の存在が考えられる。また、この地域にも仏教が伝わり、信仰が広まっていたことを物語るものと想定できる。

また、山梨の「巨摩」は、馬を表す「駒」と大陸から来た渡来人を指す「高麗」の意味を持つという説がある。馬、渡来人というキーワードは、この時代において重要な意味を持つ。特に渡来人は、高度な技術を日本にもたらした人々であり、瓦を造る技術もこの人々によって山梨の地にもたらされた可能性がある。

歴史の学習の課題の一つとして、政治の中心となっている中央で起こった出来事を学習することは多いが、その周辺や地方の状況がどのような状況であったかを学習することが少ないという課題があった。白鳳期の近畿地方での生活と山梨での生活が同じようであったとは考えづらいが、今回のように「瓦」などの遺物を通じて両者のつながりを意識させることが可能となるのではないかと考えている。

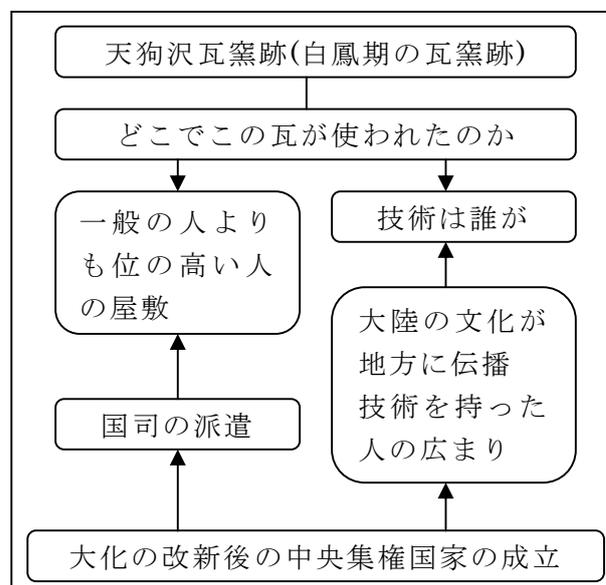


図2 天狗沢瓦窯跡を用いた授業構想図

③上条堰

a) 教材の概要

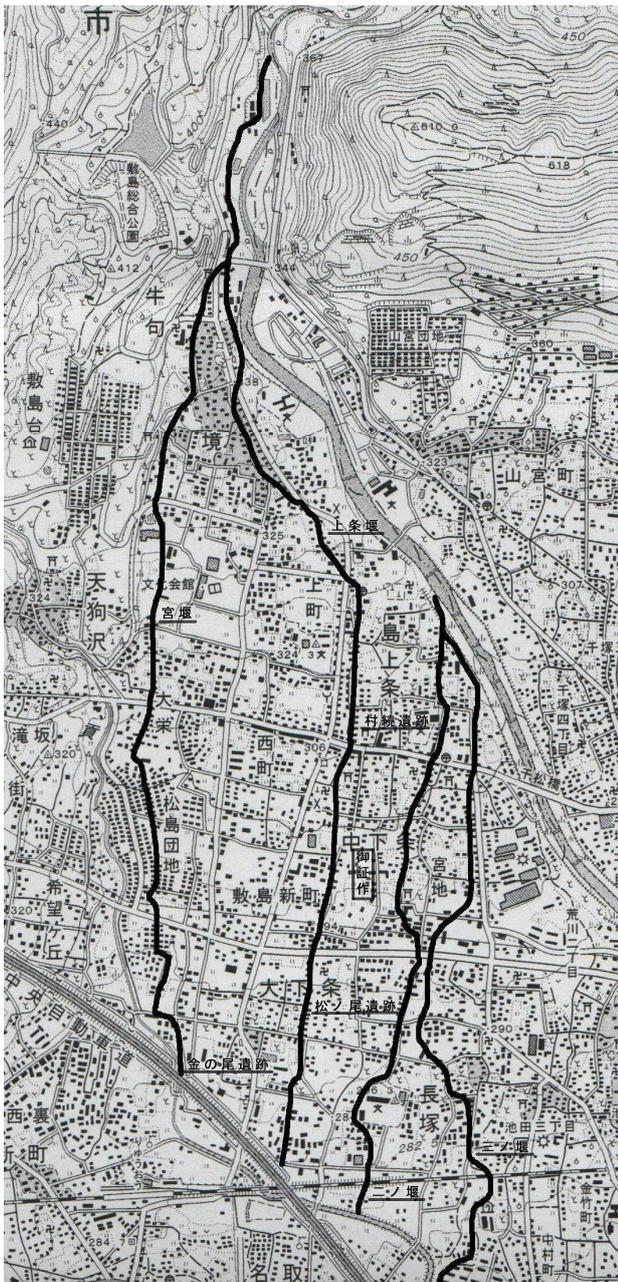


図3 敷島地区の現在の地図

甲斐市内の敷島地域に存在している堰である。敷島地域には、平安時代から存在していた志摩荘という荘園があった。弥生時代の集落遺跡として、金の尾遺跡があり、そのほかにも松ノ尾遺跡、村続遺跡、山宮地遺跡など弥生時代から奈良・平安時代、中世までの遺跡が存在している。このことを考えると古くから集落があったとされる地域であり、その

中で上条堰が持つ役割を想起することによって鎌倉時代の地方支配の様子を理解する資料とすることができると考えた。

b) 上条堰から学ぶ

上条堰は、中世から現在に至るまでこの地を潤してきた堰である。まずは、上条堰を通して学べることは何かを明確にすることから始めた。

ア) 荘園の発達

荘園は、三世一身法、墾田永年私財法を契機として出現する貴族や寺社が所有する私有地である。当初は自らが土地を開墾する自墾地系荘園が主流であったが、やがて貴族や寺社は不輸の権・不入の権を持つようになると、有力な人に土地があつまる寄進地系荘園が増えてくる。それによって、摂関政治を行った藤原氏は、大きな基盤を持ち、強大な権力をも持つこととなった。今回取り上げる上条堰は荘園のために作られた堰と考えられる。

敷島の地域には、志摩荘という荘園があったとされているが、その中で田畑となっていた部分は、現在、貢川が流れている流域であり、それが口分田として人々に与えられていた。しかし、三世一身法、墾田永年私財法が出されてから、その周辺へと堰を作りながら耕地を拡大していく。左の地図にあるように、この地域の堰は貢川から東の方へ宮堰、上条堰(一ノ堰)、二ノ堰、三ノ堰というように順次拡大している。三ノ堰の東側にある荒川は、その名の通り、「荒れる川」であり、その周辺に耕地を作ることは難しかった。貢川沿いにある金の尾遺跡から弥生時代の水田の跡が発見されており、貢川の水を利用して耕作をしていたことが予想される。

以上のことから、荘園の発達について考える要素が含まれている教材であるといえる。また、授業の主発問として、「上条堰は誰が何のために造ったのか」とすることで、当時の

支配構造を浮かび上がらせ、荘園領主が領地を広げていく過程を考えることができる。

イ) 荘園領主と地頭との関係

鎌倉時代には、荘園に幕府から地頭が派遣されるようになり、荘園領主と地頭との二重支配の構造ができた。そこで働く人々にすれば、両方に税を納める必要があったり、両方の命令を聞かなければいけなかったりと、好ましくない状況が生じてきた。しかし、税に関しては、土地の開墾、または、農具や肥料などの農業技術の発展により収穫量を増やすことによって双方への対応をしていくことになる。これが鎌倉時代の農業技術の画期的な進歩につながった。

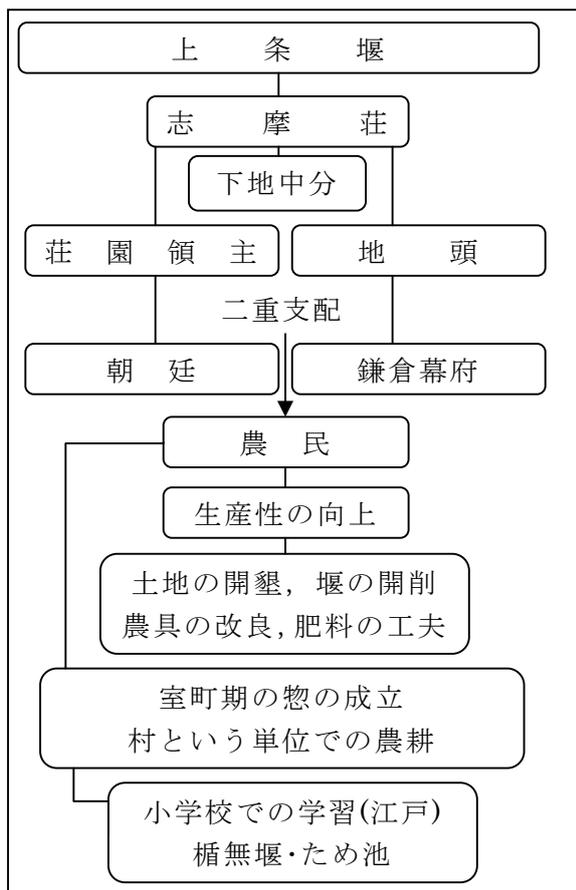


図4 上条堰を用いた授業構想図

また、この場所には荘園領主の地域と地頭の地域というように二つに分ける下地中分の

歴史もあった。敷島地域の中で、松ノ尾、中下条には領主権力の直営田である御証作の字名が残されている。そのことから、「大下条及び中下条が下地中分された志摩荘の本所方の領域である」(西川 2010)との説がある。一方、先述したように島上条の八幡神社は守護武田家や地頭土屋家との関係を持っており、また、島上条字大庭には地頭土屋家の居館が所在したという伝承がある。したがって、「島上条が志摩荘の地頭方の領域であると推測される」(西川 2010)との説があり、この地域から鎌倉時代の地方支配について考察することができると思われる。

ウ) 地名から考える土地の様子

この地域には、「田」がつく地名が多く残されている。地名は、その土地の様子を表している場合がある。「新田」とつく場所は、新田開発によって開かれた土地であることを示している。すると、「田」がつく場所には、やはり「田」が作られ、耕作されていたと考えることができる。このように、地名からその土地の様子を感じ取ることができる。この点を利用して、地図を深く見つめることによって、現在の地図からも過去の様子について想起することは可能ではないかと考える。

c) 実践授業からの考察

ここでは、12月に行った上条堰を取り上げた授業について検討する。この授業では、「上条堰は、何のためにつくられたのか」を主発問として授業を行った。その中で、研究のテーマに関わる点について考察していく。

ア) 生徒の生活に密着したものであるか

授業の中では、導入の部分で、「堰」の写真を生徒に提示した。次頁の写真から、私が生徒の反応として予想していたものは、「側溝」や「どぶ」というものを想定していた。しか

敷島地内の堰



し、実際の生徒の反応は、「堰」を即答するものであった。これは、小学校での学習経験が深く関係していると

考えられる。生徒は小学校のときに、双葉の地域に現在でも流れ、利用されている「楯無堰」を学習しており、「上条堰」はその学習経験を生かし得る教材であったと言える。また、上条堰の位置を地図で確認した時に、目印となる建物などが生徒の知識にある物であり、場所を特定することが容易に進んだ。これは、生徒の生活圏にある事象であることを物語っている。このことから、この教材が生活に密着した教材としての要素を満たしていると感じられた。

イ) 鎌倉時代の二重支配について

鎌倉時代の荘園は、荘園領主と地頭との二重支配の中で人々が生活していた。この授業では、この二重支配の中で「人々が困ること」と「それを解決するには」という点を解決していく場面を設定した。「困ること」としては、税を誰にどのように納めるのか、二人の領主からの違った命令があることが問題として出された。

特に税に関しては、「荘園の領主や地頭によって支配されていて、税をどちらに払えばよいのか分からない」とのように考え、「話し合いをしてなんとかならないか」「半分に分けてしまえば」という意見がみられた。この意見は、現実に行われていた「下地中分」に通じるものであり、この時代の人々と同じ考えに迫ることができた意見だと思う。このように、資料の提示や発問から生徒が問題の解決に迫っていくことが可能であることを示している。

生徒の感想には、「村の人々と協力すれば村

もまとまるので、仲間を作るということは大切だなと思いました」というものがある。正確に言うと、鎌倉時代は「村」といった自治的まとまりは生まれておらず、室町時代に「惣」という形で村の自治が行われるようになるのを待たなければならない。しかし、この生徒が考えたことは、この時代の人々がやがて行きつくことになる考え方であり、よい気づきをした意見ではないかと思う。こうした生徒の発想を授業の中で適切に評価することができれば、次の時代へと繋げていくことができる。生徒の「気づき」から、次への課題を設定することが可能となる。そのために、授業後の感想など、生徒の意見を残しておき、振り返る機会をつくる必要がある。

ウ) 生徒の学習感想から

地域教材を取り上げることによって、生徒は、学習内容を身近に感じ、問題解決に意欲的に取り組むのではないかという仮定の下に研究を進めてきた。物事の一面だけを考えるのではなく、多面的に考える中で理解を深めることができると考えた。上条堰を取り上げた授業の中でも、生徒の色々な意見を聞くことができた。授業後の学習感想には次のものがあつた。「私たちが住んでいる地域の周りに、こんな昔の人の歴史があつたことを知って、もっと調べてみたいと思った」、「私の祖父の家が中下条にあるので、上条堰を実際に見てみたいと思う」とのように、自分で調べてみたいという意識の高まりを見ることができる感想があつた。身近にあり、自分の目で直接確認できるからこそ意識が高まり、次への意欲が生まれてきている様子が分かる部分ではないかと思う。

また、「文明も大きな川から始まり、米づくりも川から…、歴史には川(水)が大きく関わっていると思いました。川(水)がなかったら、昔は何もできないし、始められないと思いました」という感想があつた。これは、川が生

活の中で占めている重要性に気づいた点が述べられているものである。これは、この教材を通して、堰のことを学んだだけではなく、その背景にまで発想している物と感じている。このような発想とは、「気づき」であり、「気づいたこと」を「疑問」につなげていくことが学習に幅を持たせる。今回の教材によって発想が豊かになったことを表している感想ではないかと考えている。

エ) 授業の改善点

授業後の反省会の中で、地図を読み取ることと、発問の重要性が取り上げられた。

地図の読み取りにおいては、今回の授業で取り扱わなかったものとして、堰の規模（長さ、工期の予想）を考えたり、当時の農業技術について考えたりすることによって、当時の農業の様子について深めることができたのではないかという指摘を受けた。

また、授業の前半部分では、上条堰とこの地域の荘園である志摩荘の概要について確認し、後半部分では、鎌倉時代の荘園支配について班討議を行ったが、この二つがうまく結びついておらず、前半と後半で流れが繋がらない授業になってしまっていたことも反省点である。前半部分で地図をよく読み取り、当時の土地利用について想起できれば、後半部分につなげることができたのではないかと考える。

6. 今後の課題

生徒は地域の中で生活をしており、その地域を知ることが必要なことである。そして、今回のように地域の素材を授業の中に組み込んでいくことは生徒にとって地域を考えることになり、大変に重要なことであると思う。

しかし、地域教材は、既存の資料がない状態から教材研究を始めなければならない、授業者には自ら教材の発掘を行い、教材化をはかる苦労が必要とされる。ここで紹介してきた

教材についても、授業者自身が知らなかったことが多く、苦労をするところがあった。その点、小学校の方が長らくその地域に根ざした教育が行われており、この場面においてはこの教材を利用するという計画が各学校でなされているように感じている。これが地域教材に対する小中の違いであり、これから克服していかなければならない問題である。中学校においても、教材の継続性を考え、個人の研究にとどまらず、学校単位での研究にすることが望まれる。

7. おわりに

地域教材を取り上げた授業は、知識重視の社会科ではなく、獲得した知識を利用する社会科への扉を開くものである。講義中心の授業から脱却し、生徒自らが活動する社会科への授業改善をもたらすものでもある。そして、地域を教材化することによって、教員の知識・技量も伸ばすことができる。教員と生徒が同じ地域を学びながら切磋琢磨し合い、よりよい授業をお互いに作り上げていくようにこれからも努力していきたい。

8. 引用文献, 参考文献

- 1) 寺尾健夫・野坂訓由, 2009, 「小・中学校の連続性を踏まえた中学校歴史授業の開発」福井大学教育実践研究第 34 号 pp.43-54
- 2) 西川広平, 2010 「中世甲斐国における井堰の開発-上条堰を対象にして-」帝京大学山梨文化財研究所研究報告第 14 集, pp.25-34
- 3) 福井延行, 2010 「臨海副都心(有明)における身近な地域の歴史の学習-歴史のない地域に身近な地域の歴史学習は可能か-」, 有明教育芸術短期大学紀要第 1 巻, pp.109-118
- 4) 文部科学省, 小学校学習指導要領, 2008
- 5) 文部科学省, 中学校学習指導要領, 2008